THE FAME; NEGATIVE and POSITIVE

好評のシリーズである「ゆうめいむめい」コーナー。
といってもゆうめい＝有名、むめい＝無名というわけではない。
とにかく、この京都に関わりを持つハイパワーな人を
ポジティブにそしてネガティブにスポットをあてていくコーナーである。

情報の小売店。

リーブル京都は老舗であった。

サービスが商品です。

草木も眠る丑三つ刻。というのは、もう全然流行らない。なんせ、強盗事件の多いコンビニエンスストアをはじめ、喫茶店、美容院までもが、深夜営業の時代なのだ。それにどれもが、多目的の店になってきている。これも現代のホモサピエンスの影響が大だと思われる。そこで今回は、京の本屋の大御所であるリーブル京都に焦点を絞った。

リーブル京都。昭和26年に創業されて以来、時代の流れに沿いながらジャストタイムナウな書店づくりを続けて、40余りの店舗拡大を成しとげた。その目覚しい発展の支柱となっているものは、一体何なのか？　取締役企画部長の、辻　清人さんに聞いてみた。

「営業時間が幅広くなったのは、お客さんのニーズから自然に時間が変わったんです。新しいメディアが夜型になっただけなんです。それに、構造的変化というか、多資本の導入もかなりプラスされてます。広い店を郊外に出すとか、書籍だけの販売ではないとか。これはコンビニエンスストアの影響が大きいのですが…。あと、本屋ってのはサービスよくないし、百円の本は百円っという具合いで。それじゃどうやってサービスするか？もちろん接客は当り前、ということは時間と休みを考えることになるんです。」そりゃそうだ。確かに最近、立ち読みもチェックされなくなったし、ファーストフード店みたいにニマーッと笑顔で送ってくれる店員もいる。その上、ハイテクも仲間入りしつつあるし、百科事典をCDにしてしまったり。

「これからは、ビジュアル、情報を売る時代ですよ。紙に印刷されたものだけが本じゃなくなり、本屋が情報の入発信基地になるんです。」ラジャー。思わずそう答えてしまいそうなくらい、活気的な答えが返って来た。

「ただ、頑固なことに、定価で販売しなければならないんですよね。」なかなか苦労を感じさせる一言である。今の時代、何かとディスカウント。DCブランドでもバーゲンをするのに、本屋は、筋を通しているというのか、値引きがない。そうなると、やはり売上げを上げるには、キメ手となる手段が必要になるわけだ。

「本は文化だと言うがいわゆる商品なんです。」

おっと商人攻撃。さすが、取締役企画部長。厳しさを感じた。

「ミニコミ誌は、たまにオリジナリティ溢れるけれど、マーケティングが甘いですね。」

はい、原稿を書き続けるスタッフの一人として、反省し、努力していきます。

「海外の絵本を取り入れて、日本人が親しみやすい様に加工して出したいですね。出版社じゃないけど。」

私は話を聞いたあと、改めて日本は小さいと感じるのであった。

セービングクレジットのパブリックは一人一人のお客さまに、より満足していただける利便性と快適さを追求していくことが消費者金融会社のあるべき姿だと考えています。いわばサービスこそが商品なのです。そして、パブリックは商品の向上を常に心がけた体制と会社づくりを考えています。

株式会社パブリック

営業時間／平　日・AM9:30～PM6:30
土曜日　AM9:30～PM5:00
日・祝日・第2第3土曜日は休業しております。

■本社／京都市中京区烏丸通夷川上ル少将井町229番地の2
第7長谷ビル内　TEL.(075)256-2444㈹

■登録番号／近畿財務局長(1)第00028号 京都府貸金業協会会員 第730号

THE FAME; NEGATIVE and POSITIVE

好評のシリーズである「ゆうめいむめい」コーナー。
といってもゆうめい＝有名、むめい＝無名というわけではない。
とにかく、この京都に関わりを持つハイパワーな人を
ポジティブにそしてネガティブにスポットをあてていくコーナーである。

O型。11月生まれ。姉。役者。光りの気配。

松村直美さん

最近、自分という個体さえ、見失いそうなくらい、同一化された社会なのに、キラッと光っている女性がいる。松村直美さん。22歳。神戸で生まれた直美さんは、一緒に産声をあげた（つまり双生児）妹の真由美さんと、高校を卒業してすぐに、東映京都撮影所内の俳優養成所に入った。さっぱりとした顔立ちは、世間で言うべっぴんで、あの大地真央を思わせる声はとても魅力的である。

直美さんは、いろんな事に挑戦しているらしい。忍術村のミスくの一では南京玉すだれ、素人名人会では、真由美さんと組んで漫才。しかし、名人会では、桂　小文枝が「よかったんやけどなァ。ふたごさんか？そうか、それでボケとツッコミがよう似とるんやな。もうちょっと頑張ってや。」と敢闘賞。やっぱり、双生児っていうのは、よく似た息や間を持ってるらしい。とにかく彼女は「名人会に出場したことは正解でした。漫才をしたことを人に知らせたかった。でも目の前のおばあさん、笑わへんかった。大阪はシビアですね。もっと公私共に色んなことをしないと駄目ですね。」と言っている。

彼女は欲求不満解消に、好きな者だけの13名でカットバックシアターを名乗り、9月の府の演劇祭、10月の市の演劇祭に、つかこうへいやクリスティー等で参加しようと考えている。だからと言って、仕事も忘れているわけではない。水戸黄門や暴れんぼう将軍、江戸を斬る、遠山の金さん、必殺仕事人にも、ちゃんと出演しているのだ。が、なぜか役目は、すさんだ役とか女郎の役とかが多いそうだ。

ここで笑い話をひとつ。大川橋蔵さんが、出番待ちをしている時、直美さんがかつらを付けて「おはようございます。」と挨拶。次に、またまた同じ様な格好をした真由美さんが、「おはようございます。」と挨拶。橋蔵さんは、目をまるくしてびっくりしたそうだ。

時代劇づいてる直美さんではあるが、頭が大きいのでかつらを合わせるのも大変だとか。そのせいかどうかは知らないが、彼女、現代劇での刑事役をやりたいと言っている。刑事役だけではない。彼女は、ジャンルを問わず、もちろん女優にもこだわらず、一生懸命楽しくやろうと考えている。

「これからは外に向かって、進化しないと駄目みたい、自分の存在なんてささいな事なんて思わずに冷めた目を持ち続けて大部屋から個室を目指してます。」

京都のむし暑さと底冷えに絶え、京都人の冷たい気性に戦いながらも頑張ってる直美さんは、誰が何と言おうと、やっぱりキラッと光ってる。そして、「何でも屋のおかよ」の如く、「何でも屋の直美。」は、今日も叫ぶ。「ぼうずと役者は、やめられまへん。あッ違うか。」